

十二月二日

第十五代 鈴木集藏

一九八五年（昭和六十年）十二月二日は、山城高校が熱気に溢れた日である。既に二十年前のことであり、当時の記憶は薄らいでいくのに、何故かその日のことは鮮明である。

セントラルリーグ優勝、そして日本一に輝いた阪神タイガースの吉田監督が、母校山城高等学校に帰ってきて、トツトツと熱弁をふるった。

午後一時半、ブラスバンドの演奏する「ロッキーのテーマ」にのって、監督が入場すると、ヨシダ!! ヨシダ!! のコールで体育館は割れんばかり、真中の花道をにこやかに進む。そして校歌が流れた。そのとき誰もが大合唱と思った。ところが、生徒たちは我等の日本一の先輩の顔をみつめるだけ、大きな口を開いて大きな声をはりあげる吉田独唱となった。

「校歌をうたうときは、みんな起立してほしかったなあ、腹に力を入れてみんなで、誇りある校歌を歌うことで一丸」とい

う監督のことばに、生徒はショック、しばらくシーンとなった。「みなさんは基礎を覚えるのに一番いい年代。野球も同じ、基礎ができてはじめて応用がきく。当たり前のことを、当たり前にできるように。努力する人が最後に勝つ・・・。」千三百人の生徒たちに、日本一のことばは十分しみわたった。つづいて監督と生徒のユーモアな対話ときびしい質問の時間、両者の交流、監督の立往生、爆笑の連続、腹の底から楽しく笑い合った時間であった。

この行事の誕生は、燃えた生徒の自主活動の成果。その活動を同窓会・PTAそして教職員が陰で支えた。野球の日本一はまた日本一多忙の人であった。その中から時間をひねり出すのはとてもむずかしい。生徒は「1202-Y」（十二月二日―吉田）という実行委員会をつくり、吉田さんと対話したいという署名活動、その熱情が先輩の心を動かしたと言えよう。

指導された学習の結果獲得された能力を「学力」とすると、教科以外の学習によって獲得した能力は「実力」といえよう。しかし学力と実力は片方が過大に肥大化すると、多くの問題が発生する。いつも両者のバランスをとることは大人の責任であるが、なかなかむずかしい。吉田さんを母校に招き、囲み、交流する行事を思いつき、計画そして実行。成功させた山城の生徒の「実力」は敬服すべきことである。しかも楽しい行事で

あり、教育効果限りなきものが生まれ出た。当日の生徒たちの高揚と達成感、とてもすばらしい山城の顔であった。

「六甲おろし」を会場全員と共に歌いながら別れてゆく吉田さんと生徒の姿は印象に残るものであった。十二月三日、すべてのスポーツ誌の一面は「吉田監督母校を訪れる」という記事と写真で埋まった。私の忘れ得ない山城の一面である。